

マラウィ北部の自然環境とトゥンブカ人の暮らし

■基礎情報

①気候

北部の山岳地帯は温帯気候、南部の低地は熱帯気候。
乾期は 5～10 月、雨期は 11～4 月。雨量の多い山岳地帯では 2,500mm から少ない平地部で 700mm 程度の雨量がある。首都
リロングウェは 22.8℃ (1月) 15.6℃ (7月)
年降水量 900 mm

②国土面積と人口

11.8 万 km² (水域 2.4 万 km²)、1,428.8 万人

③民族

バンツー系 (チェワ族・ンゴニ族・ヤオ族・トゥンブカ族等)

④宗教

キリスト教 79.9%・イスラム教 12.8%・伝統信仰

⑤土地利用

農地 [耕地 259 万 ha (27.5%) うち樹園地 14 万・牧場と
牧草地 185 万 (19.7%)]・森林 340 万 (36.2%)



図 マラウィ北部ンチュカ村

1. 地域の概要

マラウィ北部にある、トゥンブカ族が暮らすンチュカ村は、年間降水量は約 600mm の半乾燥地で、自然植生はマメ科植物が優占する疎開林(ミオンボ林)が広がっている。ここに、約 500 人の村人が牧畜と農耕を営んでいる。かれらはトウモロコシの粉を熱湯で練って作るシマを主食としている。この他、畑で採れるトマト、豆、ジャガイモなどの野菜類や野草、一時期には羽アリやトビケラなどの昆虫類など、年を通じて食材が得られる。

2. 自然環境と生業としての農業

村は小高い山に囲まれており、2つの異なる耕作地が作られている。ひとつはムンダと呼ばれる畑は日当りの良い丘陵地に作られ、トウモロコシ、タバコなどを栽培する、主たる畑である。12月頃雨期の始まりとともに播種される。もう一方のディンバと呼ばれる畑は川辺や谷底地の肥沃な地に作られ、トウモロコシと豆の混作や他の作物の苗が植えられる。ここは4～11月の間、随時播種が可能である。これは、ディンバのある川辺や谷の地形が要因で、乾期でも水分が多い事によると考えられている。この村にはこれら2つの畑があるために、食料不足がおきにくい。ムンダで収穫された作物が消費されて不足する時期に、ディンバからの収穫によって補うことができる。また、ディンバは2000年に起きた旱魃時でも収穫ができたほど、旱魃に強い。

3. 森林の利用度と林相変化

村人の利用度によって林相の異なる2つの林がある。住居近くの緩斜面にある林からはレンガを作る燃料とタバコの日よけに使われる木が多く伐採されるため、萌芽力の強いトウダイグサ科の樹木が優占している。住居から遠くの急斜面は伐採量が少ないために、ミ

オンボ林の代表的樹種であるマメ科のブラキステジアが優占している。これら 2 つの林は採取できる林産物も異なり、ウパカの林ではその果実が多く採取されて食用にされているのに対し、ブラキステジアの林では良質の蜂蜜が採取されている。

これらの林はいずれもウシを林内放牧する目的で火入れが行われている。ウパカは再生しやすいが、ブラキステジアの林は火入れのために優占種の更新が阻害されていると考えられている。この村では近年家畜頭数が増加し、そのために火入れ面積が拡大している。これには、タバコ栽培による現金収入の増加が原因になっている。

4. タバコ栽培の長所と短所

この村では、1986 年にタバコの栽培がはじまった。栽培面積は増加傾向にあり、現在タバコの栽培面積は主食のトウモロコシに匹敵している。タバコ栽培によって現金収入ができ、村人は携帯電話やソーラーパネルを購入している。

タバコ栽培面積の増加によるリスクとして注目するのは、タバコ畑の開拓による森林伐採面積の増加と、救荒作物としてのキャッサバ栽培の変化である。タバコ栽培の導入後、キャッサバの栽培面積が縮小あるいは放棄されている。キャッサバは降水量が少なくても収穫できる作物で、この村のディンバと同様に、食料の安定確保上重要な作物であった。また、タバコ栽培には化学肥料や労働力が必要で、それを国からの借金でまかなっている。例年どおり降水量が得られれば経費は回収できるが、降水量が少なくなると回収できない。村人はこのようなリスクの上に立ってタバコの栽培を行っている。

5. SATOYAMA イニシアティブの視点から

熱帯半乾燥地において伝統的な農業をするンチュカ村の人々は、地形を利用した 2 つの畑をつくり、さらに救荒作物も用意することによって年中食材を得かつ旱魃にも対応できる仕組みを作っていた。ここに約 30 年前から換金作物の栽培が始まったために、伝統的な、危機対応できる仕組みが犠牲になりはじめているともいえる。

参考文献

藤田知弘. 2007. 「マラウイ北部の自然環境とトゥンブカ人の暮らし」, 地理 10 月号 Vol. 52, p80-85.